コロナ第７波で子供の感染２・２倍…小児病床は綱渡り、手術延期も

2022 年 08 月 11 日読売新聞

新型コロナウイルスの感染「第７波」で子どもの感染者数が第６波ピーク時の２倍以上にのぼり、受け入れる病床が逼迫（ひっぱく）している。脱水症状や熱性けいれんで、救急搬送され入院するケースが目立つ。子どもの高度医療を担う病院は限られており、通常診療への影響が懸念されている

「経験のない厳しさだ」

入院する子どもは家族とオンラインで面会している（大阪母子医療センター提供、画像は一部修整しています）

子どものコロナ患者を多数受け入れる国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）の庄司健介・感染症科医長は、窮状を訴える。同センターは７月以降、子どもと妊婦用に確保した４０床では足りなくなり、何とか３床増やした。それでもほぼ満床状態が続く。

第６波では、多くても６～７割の病床使用率だった。家庭内感染を防ぐための隔離入院にも対応したが、現在、その余力はない。同センターは国内有数の小児専門病院として全国から様々な病気の患者を受け入れている。「手術を減らすなどの制限はまだしていないが、ぎりぎりだ」（庄司医長）という。

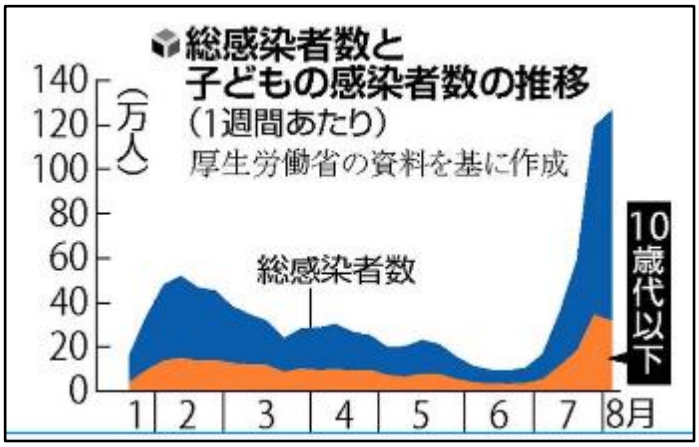
全国の新規感染者が過去最多となった第７波では、１０歳代以下の感染者も急増、７月下旬には１日平均で約５万人に上り、第６波ピーク時の２・２倍となった。

コロナに感染し入院中の赤ちゃん（右）（大阪母子医療センター提供、画像は一部修整しています）

大阪府の小児医療の要である大阪母子医療センター（大阪府和泉市）でも、７月に入り、感染した子どもの入院要請が急増している。小児用のコロナ重症病床６床に加え、軽症・中等症病床２５床を確保するために、夏休みに予定していた手術の延期や救急診療体制の縮小を余儀なくされている。

オミクロン株は、発熱やのどの痛みが起きやすい。熱性けいれんで運ばれてくる子どもが増えており、熱や痛みで水も飲めず、脱水症状となり点滴治療のために入院するケースも多い。

同センターでは、脳炎や脳症になるなどして重症病床に入院するケースも増えている。新生児科・感染症科の野崎昌俊副部長は、「脳炎や脳症などによる重症者は子どもの専門病院が受け入れる必要がある。脱水症状などであれば、小児科がある一般病院での受け皿を広げてほしい」と訴えている。



親はどうしたら？

子どもの感染者が急増する中、親は何を気をつければよいか。国立成育医療研究センターは、コロナの子どもが自宅で療養する際の注意点をまとめている。食欲があり、顔色が普通であるなどの場合は、基本的には心配がないとする。

　ただ、意識がはっきりしない、水分がとれない、嘔吐（おうと）を繰り返すなどの場合は、早めにかかりつけ医に相談。けいれんを起こしている場合は、救急車を呼ぶなど、すぐに受診するよう求めている。

　また、ワクチン接種を勧める専門家もいる。斎藤昭彦・新潟大小児科教授は、「感染者の増加に伴い、まれとはいえ、脳症などを起こす子どもも報告されている。重症化予防のために、ワクチン接種を積極的に検討してほしい」と話している。